

僕のアラスカ遠征

関谷 雅章

アウトサイドに乗って漕いで漕いで漕ぎまくって最後の町アラカヌックに着いて一番最初に思ったのは「やっと終わったァ!」ということであった。毎日同じような景色、時折吹く向かい風とそれに伴う波にうんざりしていたからだ。遠征が終わりつつあるときはいろいろ考えることもあった。これは隊員の一人として思ったことであり、アラカヌックのグロッサリーストアで物価を調べた後「やっとなることが終わった、よくこんなことやってきたなあ」と思った。それと共に緊張感から解放された。これは食糧係として感じたことである。そう、航行開始の時からずっと緊張感に捕らわれていた。もし航行途中で食糧がなくなれば非常事態となり、その責任はすべて食糧係の私にかぶさってくるわけだから、天候の悪化などで動けなくなり停滞日などが続いたりした時はなおさらだった。そんなときは日本から持参したハーモニカで浜省を吹いたりもしたが。しかし反対に航行中の数少ないメニューのローテーションにあまり文句を言わなかった皆に感謝もした。

日本に帰ってからは、アラスカに入ってからそれぞれの町の子供達のことを強い印象として残っている。ユーコン河もアラスカに入ると旅行者がほとんどいなくなるため、我々が村に上陸すると好奇心旺盛な子供たちが群がってくる。初めはおとなしいのだが、我々に慣れてくるとちょっかいを出したりいたずらをしたしたりし始める。この時点で子供は悪戯鬼へと変身する。初めに甘い顔をするともう手に負えなくなるので初めから厳しい顔をせねばならないということを学んだ。しかし、やはり子供は可愛い。アラスカに来て久しぶりに子供らしい子供というのを見た気がした。今時の日本の子供のように大人びていて可愛くないのとは反対に、素直に子供と思えるような子供であった。何か変な感じがしないでもないがこれが正直な感想である。会うと憎たらしいが、別れるとまたあいたいと思う、そんな子供達であった。アラスカはええところじゃ!

